

福島原発事故の背景にある「構造災」を考える

—科学社会学の視点から—

松本三和夫*

東京大学大学院人文社会系研究科社会学専門分野・教授

シーベルト、ベクレル、半減期、除染等々。最悪とされる福島第一原発事故以来、科学用語、技術用語が日常生活に登場し続けている。そして、科学や技術のことを真剣に考えるため、まず発電用原子炉を正しく理解しよう、という話法が存在する。他方、いまこそ科学技術文明の転換期であり、科学技術一辺倒のくらしのあり方を反省しようという、ざっくり反省を促す話法も存在する。それぞれに重要なことである。ところで、ともに、身の丈に合ったなにかが乏しい気がする。福島事故は元来他人事ではないはずなのに、他人事になってしまうような効果をどこかに備えている気がする、といいかえてもよいかもしれない。

この発表では、福島事故を他人事にしないためになにがもとめられ、他人事にしない見方からはどのような展望が開けてくるかという点にあえて注目したい。表題に掲げた「構造災」とは、いわば福島事故を他人事にしないためのものの見方と考えていただきたい。「構造災」とは、科学と技術と社会をつなぐ複数のさまざまな制度設計のあり方や、そこに登場する複数の異質な主体がおりなすしくみやネットワークの機能不全に由来する失敗をさしている。「構造災」であることが見落とされたままの場合、科学だけを完全にしようとしたところで、問題の再発は防げない。技術だけを完全にしても問題の再発は防げない。社会が倫理だけで規制しようとしても問題の再発は防げない。どうすればよいだろうか。

福島事故が「構造災」だとすると、たとえば科学知や技術知のような専門知だけに訴えて常に解決できるとみなさない慎重な思考が肝要だ。低線量被爆のリスクの問題が端的にものがたるように、科学技術と社会の境界で発生する争点に不確実性がともなうのはごく普通のことだからである。他方、社会の意思決定だけによって解決するとみるのも非現実的だ。発電用原子炉の立地過程がものがたるように、社会の意思決定がさまざまな不確実性を抱えこんでいることはよく知られている。つまり、もし福島事故が「構造災」だとすると、その原因は科学技術と社会とがともに決め合っているという見通しを与えてくれる。同時に、「構造災」を解決する際も、科学技術と社会が互いに決め合うようなしくみを設計する必要があることを教えてくれる。いずれにせよ、「決め合う」際には、いろいろな不確実性が干渉し合い、問題がとても複雑になる。副題に掲げた科学社会学の視点とは、そういう事情を表だって考える態度をあらわしている。

この発表では、そういう複雑な問題が福島事故に含まれているという見方にたって、科学社会学の視点から福島事故についてこれまであまり語られてこなかったと思われる「構造災」の側面を浮き彫りにし、問題を解くための糸口を提示する。とくに、「構造災」であることによって派生する無限責任の問題に注目し、無限責任を有限化したうえで社会的に適切な仕方責任を配分する仕方を展望したい。その際、福島事故後の科学社会学学会(**)による取り組みなどもふまえ、発電用原子炉の高レベル放射性廃棄物処分問題を福島事故と対になる問題と位置づけ、その社会的な含意をつまびらかにしたい。

*e メール: miwao@L.u-tokyo.ac.jp

** <http://www.sssjp.org/>